

施設介護職員が認知症高齢者と絵本を読み合うことの意味研究

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
村上 歩未

本研究では、グループホームの四組の介護職員と認知症高齢者(以下、利用者とする)に協力してもらった。介護職員にとっての介護現場で絵本を読み合う意味を考察することを目的とした。読み合い場面の観察と介護職員に対してインタビューを行った。分析1では、各介護職員の語りを分析し、9つの変化点のグループが形成された。分析2では、読み合い場面での利用者の反応や介護職員の関わり方など特徴的なエピソードを個別的に取り上げた。これらの結果から、施設介護職員が利用者と絵本を読み合うことには、①利用者への理解の深まりがあったこと、②利用者の反応と共に介護職員の言動や気持ちが変わること、③利用者と1つのもを共有しているという実感が生まれること、④もっと関わりたいという気持ちにつながる、という意味があることが考察された。これまで、読み手側の気持ちを明らかにすることやボランティアではなく介護職員が読むという研究は行われてこなかった。また、言葉のやり取りが出来なくても、各介護職員にとって絵本を媒介に利用者とやり取りをしたことが、実際の介護の場面でも生かされ、4点の意味を見出すことができた。このことから、認知症高齢者ケアを高齢者ケアの標準とすることを目指す現代社会において、介護職員自身が利用者となつたがりを作ることやどう関わるか一人の利用者のことを考えることが機会となる可能性があるだろう。